広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	三島由紀夫の『仮面の告白』と『金閣寺』と『禁色』におけるニヒリズム
Author(s)	ヘレナ バートン,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 15期 : 113 - 119
Issue Date	2001-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038911
Right	
Relation	

三島由紀夫の『仮面の告白』と『金閣寺』と『禁色』におけるニヒリズム

ヘレナ・バートン

三島由紀夫（本名公威）は１９２５年に東京で生まれ公務員の長男だった。１９４４年に天皇の表彰をもらって卒業してから１９４８年に最初の小説を書いた。しかし、１９４９年に『仮面の告白』を書いた時まで文学的な偉い地位まだ完全に定めていなかった。彼は小説を８冊、歌舞伎の芝居を４冊、短編を５０冊、1幕の芝居を１０冊と小論の本を幾つか書いたわけである。

三島は日本の帝国の歴史の強さを信じていたが、戦後の日本の西洋化が彼に深い痛みを感じさせたようである。この気持ちは小説の中によく反映されている。１９７０年に彼は政府に対してのクーデターが失敗してから切腹した。

１９５０年に三島は能芝居９冊を現代的に書き直し、複雑な事も書き入れた。こうして、三島は『仮面の告白』の書く様式を繰り返していった。能芝居を書いた時に三島の想像力は伝統的で特別な能芝居のかげで制限された。また、『仮面の告白』を書いた時に、彼は、彼の詩的な様式をやめて、もっと論文的な様式で書いた。それで本当に有名になった。

この次に三島は和風と洋風な書き方が混ざった小説を発表した。この時代に日本でヒーローがいた小説は少なかったが、三島の小説は洋風な小説みたいにヒーローがいた。しかし三島のヒーローの感情を読者に理解させるのは難しくて、時々ヒーローとアンチヒーローの違いは分かりにくかった。特に『禁色』においては読者は主人公である「悠一」に同意したり「俊輔」に同意したりを繰り返す。

三島は洋風な様式でよく書いたけれども彼の小説の中に物語りと関係なさそうな部分もあり、この写実的な書き方はとても日本式であった。そうして、小説に出てくる場面はよく変化して、洋風な小説を好む読者にとってこの書き方は可笑しいと思うが日本では珍しくない。それで三島は洋風と和風な様式を混ぜながら小説を書いたわけだ。

『仮面の告白』はおそらく三島の作品の中で一番面白い小説であろう。私小説とよく呼ばれているが本当に自叙伝と言う物ではないであろう。若者の人生や彼の同性愛や社会から除外される事の話だ。主役の伝記の細かい事は三島と同じで、主役は「こうちゃん」と呼んで、三島の本名は本名公威だから、名前さえにも作家と主役が似ているわけである。

しかし、この時代の日本では文学の心は告白ばかりだったようである。でも三島自身はインタービューではっきり、美術と命は離れた世界の事だと思うそうだ。この小説の題名『**仮面**の告白』も小説の解釈のし方について手がかりを暗示している。「Lippit」というイギリスの研究者によると三島は“ The true essence of confession is its impossibility, for only a mask with flesh can confess” と言った。この意味は本物の人間は正直に告白ができないが仮面をかけている人間は、その道具でフィクションと実際を混ぜながら心から告白ができるという意味である。

自叙伝でも、出来事を個人的に解釈するとそれ故にフィクションになるわけであろう。このとおり、『仮面の告白』は完全なフィクションではなくても自叙伝と呼ばれるわけではない。三島由紀夫についてのいい伝記が存在していないが『仮面の告白』を彼の同性愛と若い頃の事の告白で読んでいいと思う。

文学的な話題で同性愛を告白するのは先例のない事であった。三島にとって書く様式の変わる時であり、初期の作文の詩的な様式が終わって、もっと成熟して、論理的な様式が始まった。この『仮面の告白』で始まった成熟した書き方の方が成功であった。

一方で三島の同性愛を告白している小説だけではなく、彼の本当の顔より仮面の方が好きな事を告白し、詩より構造がなく現代的な書き方で自分の感じを表現する事の方が楽だという事も告白していると思う。

自己性欲も同性愛も三島の小説の中ではよくあるテーマだが三島の性欲における他の告白もある。彼の人生の終わりにボデイビルと軍隊の従事に特に興味を持つようになった。理由はおそらく好きな男のようになりたがっていただろうがこれでも三島の性欲についての告白している。三島はサデイストでもこの運動を一生懸命やってみる部分は三島の劣等の気持ちを告白していて、面白いと思う。

いろいろな告白をしている部分はある。三島の小説の中に女嫌いは大事なテーマで、これも告白的に彼の性欲と関係があるテーマだ。女嫌いと言うテーマは『禁色』に特に明白だと思う。『禁色』の語り手は女性が彼の人生を破滅させたと信じて、女達に仕返しをしてみるわけである。『禁色』の中に女性は唯物論者で意地悪い物と描写されている。

> 『でも。。。恭子は泣きながら、謙虚に身を撚った。「あたくし、今、まだ憎む余裕なんかありませんの。ただ、恐ろしいだけなんです。」p. 132

この例で「恭子」は「悠一」がいないと存在できない女として描写されている。自分の決定ができない女で可哀想な気が弱い人間で描写されている。この前に「恭子」は「悠一」に

> 『私の死ぬか訴えるか、とどちらかします。』p.131

と言うので読者は彼女が愚かであることをよく分かるようになって、強くて賢い女で敬えないものになる。三島の作品の中で、ある女性はずっとこんなに馬鹿にしている。
しかし三島の作品の中では女嫌いばかりではなく、外人嫌いも大事なテーマである。特に金閣寺の中で外人差別が多い。

『彼は抒情詩人なのかもしらないが、その澄んだ青い目は残酷に感じられた。。。。彼の太手が下りて来て、襟首をつかまえって私を立たせた。しかし命ずる声音はやはり温く、やさしかった。「踏め、踏むんだ。」抵抗しがたく、私はゴム長靴の足をあげた。米兵が私の肩を叩いた。私の足を落ちて、春泥のような柔らかいものを踏んだ。それは女腹だった。女は目をつぶって呻いていた。「もっと踏むんだ、もっとだ。」私は踏むんだ。』p.83

この例で外人嫌いも、女嫌いも、三島のサヂズムも描写されているのでとてもニヒリスチックで大切な引用だと思う。
三島の小説のテーマというのは、同性愛や女嫌いや外人嫌いよりニヒリズムというテーマの方が強くて目立つ事だと思う。シェークスピアのハムレットのように、三島の世界の中ではすべてが腐敗していて感動させるものは何もないようである。三島は破壊に取りつかれている。『仮面の告白』の中では、この破壊は感情的な破壊である。

『素晴らしいことであった。愛しもせずに一人の女を誘惑して、むこうに愛がもえはじめると捨ててかえりみない男に私はなったのだ。』p.176

しかし『仮面の告白』の中では「こうちゃん」は女性を感情的に破壊させるばかりではなく、彼自身にも感情的な痛みを感じさせて絶望させている。

『それはその時々に私が仮構した「甘さ」の調子でもなく、また後になって私が整理の便法として用いた事務的な調子でもなく思い出の隅々までが一つの明瞭な、苦しみの調子に貫かれていた。。。しかしこの苦しみは悔恨ですらなく、何か異常に明晰な。。。苦痛なのである。』p.192

本当に感情的なニヒリスチックな例である。このように、『禁色』の中ではこの破壊は社会的な破壊である。「悠一」はずっと俊輔の命令で感情も愛も行儀も考えずにいろいろな女性や少年と寝てしまい、社会的な規則を破壊をしている。

『「君は危険な附き合いがあるんだね。」電車が歩み寄りながら、俊輔がそう言った。

「だって、先生だって僕なんかと附合があるじゃないですか？」悠一がそう応酬した。
「殺すとかどうとか言っていたようだが。。。」』p.380

この例で描写するように『禁色』の中では倫理とか社会的な行儀は完全によじれていて破壊されている。『金閣寺』の中ではこの破壊は物質的な破壊である。最初の部分から主役は物に損害を与えている。

『私はポケットから錆びついた鉛筆削りのナイフを取り出し、忍び寄って、その美しい短剣の黒い鞘の裏側に、ニ三条のみにくい切り傷を彫り込んだ。』p.11

この有害な行動は終わりまで続く。彼は女性の腹を踏んで、最後に本物の金閣寺を燃やす。

『ここから、金閣の形は見えない。渦巻いている煙と、天に沖している火が見えるだけである。木の間をおびただしい火の粉が飛び、金閣の空は金子砂子をまいたようである。』
p.275

戦時中に生まれた人たちの中でこのような破壊に取りつかれる事は珍しくない。三島は戦時中に殺されなくて怒っていたと思う。『自分の未来から救うために戦争に殺されるはずだった。』（The war ought to have killed him and saved him from his future）と書いていた研究者もいる。

どんな理由でも三島は正常より異常、感情的な関連より孤立、感激より身体のエロチシズムの方が好きというのは事実だと思う。三島が書いた登場人物は別の性格がない物で、他の登場人物からも読者からも感情移入を引き起こされない物だそうである。『金閣寺』の少年は特に性格がない者である。本物の少年のような描写ではなく、一般的な若者のような考えだけだと思う。あるいは陰気でニヒリズム的な描写である。

『実際に着手して、何かをやり遂げようという気持ちがまるでなかった。。。孤独はどんどん肥った、まるで豚のように。』p.11

三島自身と三島の小説の登場人物は自己陶酔のかげで孤立させているか同性愛の問題のかげで孤立させているか分かりにくいが、どんな理由より孤立させているという事実の方が大事な点だと思う。三島の小説の中では人間の人生に対する支持とか希望は全然描写されていない。

三島の小説の中ではいろいろな分かりにくいシンボルがあり、読みながら考えなければならない点もたくさんあり面白いと思う。例えば、同じ名の小説の中に金閣寺が燃え

尽きた場面は、一方で若者の禅に対して反抗する事や新しい洋風の生活に影響される事の隠喩で書いていたかもしれない。また一方でこの場面は戦後の社会的な反抗と社会のニヒリズムのシンボルかもしれない。

たぶん、この二つの説明よりもっと簡単な説明の方がよいかもしれない。例えば、場面は三島の美しさが嫌いな気持と破壊が欲しい気持を告白しているのかもしれない。いろいろな考え方があるので三島の小説を読むと面白い。

しかし、三島のニヒリズムはたくさんの要素の結果であろう。彼は日本の文化を愛していて、戦後に文化の破壊が起こると思いながら、否定的になったからかもしれない。もう一つの考え方は戦時中に三島はロマンチックで悲劇的な死を望んでいたがかなえられなかったので、人生はいつまでも同じように興味やパッションなしで続いていると三島は思っていた。同じ考え方で、戦後に金閣寺はまだそのままで建ち続けているが今日本の誇りのシンボルではなく、破壊する方がよかったと思って少年は火をつけたわけである。

この意味がなく、つまらない、いつまでも続いている人生は『禁色』にも大切なテーマだと思う。「俊輔」は「悠一」の美しさを見ると苦しんでこの美しさを統制して破壊したいようになるわけである。三島の小説の中にこのニヒリズムや憎しみは本当によくある事である。

三島自身は同性愛の孤立や異常で醜くなった人で存在する事にこだわる事は三島の小説のなかにある人間を描写する事と関係があると思う。

三島の死にこだわる事はいつも美しさと関係がある事である。彼にとって死と関係がないエロチシズムは可能でない事である。三島自身はBeauty really is dangerous, existing only where life itself is threatened with annihilation"と言った。この意味は『生命が脅されていないと危ない事の美しさは存在ができません。』この考え方は小説の中にずっと表される事だ。『仮面の告白』で主役と「近江」の関係は性的で、感情的な関係は全然ない。

> 『しかも、それは明白に、肉の欲望にきずなをつないだ恋だった。』p.53

> 『私がかと、充溢した血の印象と、無知と、荒々しい手つきと、粗放な言葉と、すべて理知によって些かも蝕ばまれない肉にそなわる野蛮な憂いを、愛しはじめたのは彼のゆえだった。』p.55

この引用で彼の愛のニヒリズムや暴力が分かり、感情的な愛ではまったくないであろう。

同じように『禁色』のなかに主役の「悠一」の美しさを女性を苦しませる道具として使いたいから彼に興味がある、が感情的な理由がない。たぶん一番明白な例は『仮面の告

白』にある例である。主役は自分の死を今にも起こりそうな感じがなければ「園子」との関係が全然発展しないであろう。

『こんなにも豊かにめぐまれた日光が私の上にあり、こんなに何事もねがわない刻々が私の心にあることは、何か不吉な兆したとえば数分後に突然の空襲があって私たちが立ところに爆死すると謂った不吉の兆しでなければならぬような気がした。』p.120

『仮面の告白』の中では、彼はずっとすぐ死ぬと思っているから、「園子」と結婚する事について心配するのは必要ではないと思う。この愛はずっと最初から終わりまで死と関係がある愛である。

三島の作品の中で死とエロチシズムと関係がある例はよくある事である。『仮面の告白』の主役は死ぬところの軍人に魅力を感じている。三島の作品の中で、楽しみと美しさは疑いと心配とよく混ざっていて、ニヒリズムや通苦はよくある事である。『仮面の告白』の中では死も痛みも苦しみもよくあることである。

『私のぐるりにある夥しい死、戦災死、殉職、戦病死、戦死、轢死、病死のどの一群かに、私の名が予定されていない筈はないとおもわれた。』p.172

そうして、やはり、血や死やエロチシズムはよく混ざることであり、次の引用の中で「こうちゃん」の同性愛や暴力が愛することや命、血、性を全部混ざることはよく描写されていると思う。

『これを見た時わけてもその引き締まった胸にある牡丹の刺青を見た時に、私は情慾に襲われた。。。。私は園子の存在を忘れていた。私は一つのことしか考えていなかった。彼が真夏の街へあの半裸のまま出て行って与太仲間と戦うことを。鋭利な匕首があの腹巻をとうして彼のトルノオに突き刺さることを。あの汚れた腹巻が血潮で美しく彩られることを。彼の血まみれの屍が戸板にのせらっれて又ここへ運び込まれて来ることを。』p.211

三島のニヒリズムはこれではっきり描写されていると思われるのでとても大切な引用だと思う。

三島は日本の文化にも関心を持つ、これも彼のニヒリズムと関係がある事である。彼の最初の作品『花盛りの森』（１９４４年）は愛国心的な修辞を持つ作品で帝国の歴史の美しさと優美を誉めたたえた。日本の本質に関心もっていたようである。彼の作品の中に日本の文化的な目印はずっと存在している。大体丁寧に描写されているが『金閣寺』に生花や禅や音楽という日本文化は盗みや放火や外人嫌いや女嫌いという嫌な考えと対

照し一緒に描写されている。たぶん外人嫌いと女嫌いの考え方は特に戦後の日本人の考え方と違いないかもしれないが、少年が生花を投げる事と金閣寺を燃やす事は破壊的な感情をはっきり表す事である。また三島のニヒリズムは、日本の西洋に対しての絶望と若者に対して不面目な感情とが結び付いている。

三島の結婚と『金閣寺』を書いてから次の１５冊の作品の中に彼の愛国心がかかれている。殆どくだらない例ばかりでも研究者の「美好」は侍の生活が勇気と今にも起こりそうな死でいつも描写されているという。（Over and over Mishima advocates the way of the Samurai and pleads for a revival of the kamikaze spirit）.

次の西洋に対しての嫌悪感と戦争に対してのあこがれの頂天は『若人を蘇れ』を書いた時（１９５４年）そうして『私が友ヒットラ』を書いた時（１９６８年）であった。彼の考えはだんだんもっと政治的になってから空手も陸軍の運動もやり始めたので自分の体の強さが増えた。最後に政府に対してクーデターをやってみて切腹した。

１９６７年に「中村」に手紙を書いて『自殺は作家の作品をぜんぶ活動的にする。』と言ったから、はっきり死にたがっていたと分かるであろう。そうして、昔の先生に手紙を書いて『この作品が終わると私の世界が終わる。』と言った。クーデターは切腹の副産物だそうである。

三島の人生の中に彼の外見はずっと問題として感じていた。運動を始めて、自分の身体の方が格好よくなると問題がすくなくなった。三島の昔の日本に対してのあこがれや彼のニヒリズムや同性愛と孤立のせいで作品を完成させたら生き続ける事ができなかった。彼自身が運動で美しくなると生きる理由がないと言う人もいるがどんな理由にせよ三島由紀夫は切腹する前に作品も自分の身体もちゃんと働き終わって死んだ。

書誌

三島由紀夫　『仮面の告白』　発行所—新潮社　発行者—佐藤隆信　１９４９

三島由紀夫　『金閣寺』　発行所—新潮社　発行者—佐藤隆信　１９５６

三島由紀夫　『禁色』　発行所—新潮社　発行者—佐藤隆信　１９６４

Miyoshi Masao, *Accomplices of Silence-The modern Japanese Novel*, California UP, London, 1974

Ueda Makoto, Modern Japanese Writers and the Nature of Literature, Stanford UP, California, 1976